

情報の共有と実践に関する文化人類学的研究試論

高知県下の「犬神」と「予感」を事例として

酒井貴広（早稲田大学）

本発表は、情報の共有と実践をテーマに据え、文化人類学が現代社会の様々な課題へ取り組む道筋を議論するものである。グローバリゼーションの進展に伴いモノやヒトの移動が活発化した現代社会においては、メディアを通じて人々へ情報発信がなされるだけではなく、情報が物質的現実を拡張する（augmented reality）、あるいは情報のみで構成された仮想現実（virtual reality）が生まれる状況を生み出している。その一方で、これまで多くの議論がなされてきたように、地域住民の紐帯に支えられた情報共有が、彼ら・彼女らの日々の生活実践を緩やかに規定し続けている。本発表では、情報の共有が歴史的な時間の流れ（経糸）と共時的な営み（緯糸）の結節点として人々に働きかけ、条件次第では時間の流れをも逆行する四次元的な実践形成であるとの視座から、今後我々が複雑化した現代社会の諸課題へ取り組む術を模索する。

これまでの発表者の研究は、高知県下における「犬神」と「予感」をテーマに、それらにまつわるインフォーマントたちの語りと社会の在り方との連環を解き明かそうとするものであった。「犬神」とは西日本を中心に広がる民俗事象・憑きもの筋の一種とされ、周囲の人々から「犬神」に指定されてしまった家筋の者が結婚を忌避されるなど、深刻な社会問題の原因となっていた。考察の結果、近年の高知県西部幡多地方において、人々の抱く「犬神」観が多分に変容していると結論付けられた。加えて、その変容は上記の社会問題を解消しようとする「憑きもの筋研究」が、積極的に地域社会へ働きかけた結果引き起こされた可能性もある。以上に鑑みると、高知県における「犬神」は、学術研究の言説と地域社会の言説が接触した際の、特徴的な反応を示唆していると考えられる。

他方、「予感」とは、富山一郎の議論を下敷きに（富山 2002: 24-42）、まだ見ぬ物事への曖昧な不安が惹起する心意と定義したものである。発表者はこの枠組みを用いて、高知市沿岸部で南海トラフ地震に備える人々の語りや取り組みを分析してきた。現時点で得られた知見によると、昭和 21（1946）年の昭和南海地震を経験した人々は、過去の体験から南海トラフ地震の被害を「予感」する傾向がある。一方で、若い世代や昭和南海地震を経験していない人々は、東日本大震災、北海道胆振東部地震などの、近年発生しテレビ番組やインターネット上で盛んに情報発信された地震の情報を基に、（直接的な関係がないとも言える）南海トラフ地震の被害を「予感」している。

キーワード：実践、情報、課題、共有、高知県

さらに、インフォーマントの中には、自然科学が提供する地震の情報を「説得力」があるとして信頼する人物も多い。しかし同時に、それらの研究結果が予測する南海トラフ地震のもたらす被害は余りにも激甚であるがゆえに、防災・減災への積極的な取り組みを諦め、襲い来る運命に身を任せようとする者も散見される。この現況を踏み込んで解釈するならば、学術研究が防災・減災へ取り組む営みそのものが、地域社会の人々の防災・減災への意識を阻害している可能性も指摘できよう。

災害に関する情報発信が、人々へ正しく伝わっているのかに着目した研究として、中谷内一也の仕事がある。中谷内は、インターネット上で実施した災害（火事と地震）に対する防災・減災情報にまつわるアンケート結果から、2 つの指摘をなす（中谷内 2018）。第一に、学術研究に基づいた防災・減災の正確な情報が提示されたとしても、人々がその情報を正確に理解する割合は多く見積もっても 2 割未満という低い割合に留まるという。第二に、少ないながらも情報を正確に理解した人々は、災害に対するリスク意識が明確になり、より積極的に防災・減災へ取り組む傾向が見られるとされる。

中谷内論文の意義は、災害に関する情報発信の難しさを明確にするとともに、その問題に対する実践的対策の端緒を拓く点にある。中谷内の指摘に従うと、災害に関連する研究成果の社会還元が現状で十分に達成されているとは言い難いものの、今後人々のリスク意識を喚起する働きかけをなすことができれば、この問題への実践的改善案を提示し得ると推測できる。これは、「犬神」という社会問題の解消を志向した憑きもの筋研究の実践が、一種の情報として地域社会に共有され、人々の抱く「犬神」観や実践の在り方そのものを変容させたことも軌を一にしている。

本発表では、一般的に課題解決型と捉えられてきた実践的学術研究が、時に地域社会へ新たな課題を生じさせる働きかけでもあることを指摘する。加えて、こうした学術研究と地域社会の双方向的な関わりを考慮した上で、今後の文化人類学的研究がいかに社会の諸課題へ貢献し得るのかを議論する。

参考文献

富山 一郎

2002『暴力の予感』岩波書店。

中谷内 一也

2018「オンライン調査による災害情報効果測定の問題」『災害情報』16：153-161。